

私立大学情報教育協会
社会福祉学・社会学・教育学・体育学グループ
分野連携アクティブ・ラーニング対話集会

＜体育学分野＞ スポーツの社会的機能を活用して 社会の発展に寄与する授業の提案

2017年12月16日（土）於 早稲田大学早稲田キャンパス
報告担当：田附俊一（同志社大学）・來田享子（中京大学）

（背景1-1）授業の到達目標について

▶ 体育学教育における「学士力」

- ① 身体運動による健康の維持増進の重要性を学術的に理解できる
- ② 身体運動の効果を体感することにより、心身ともに充実したライフスタイルを送ることができる
- ③ スポーツの競技に関する知識・技能を修得し、スポーツの振興・普及に活用できる
- ④ 身体文化としてのスポーツが持つ社会的機能について理解し、多文化・多様性を尊重する社会の発展に貢献できる

→コア・カリキュラムは人文・社会科学系の科目

1

（背景1-2） 過去の対話集会における検討

- ▶ 2016（H28）年1月24日 対話集会
- ① スポーツを通じた国際協力・開発分野の動向
大学生が国際協力をすることに関する現状と課題
(大阪大学大学院 岡田千あき氏)
→教育活動の実践事例についても紹介
- ② カンボジアにおけるスポーツ・プロジェクトの紹介
(国際武道大学 木村寿一氏)

この対話集会では、以下を検討

- 教育内容が国際的な基準にも合致しているか
- 海外フィールドワークを含む学習が大学において可能か
- 海外フィールドワークにはどのような課題があるか

2

（背景2）到達度

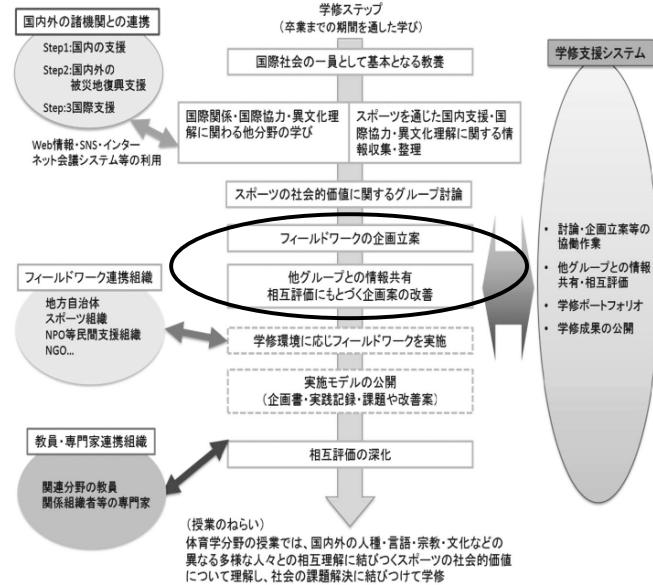
- ① 自己実現、自己と他者の尊重、社会参画、相互理解と共生などのスポーツの社会的機能を理解できる。
- ② 上記①の理解に基づき、スポーツプログラムやスポーツ振興・普及人材の育成、組織マネージメント、非スポーツ関連組織との連携のなどについて立案や実践ができる。
- ③ さらに①と②を国際的な視野から考えることができる。

本報告で紹介する授業実践は、

- ①：2つの大学（同志社・中京）の個々の講義で学習
- ②：学習の初期段階としてA Lを実施

3

授業にICTを活用したシナリオにおける位置づけ



4

実践紹介

▶ 2017年12月8日（金）10:00-11:30 (90分)

▶ 参加者

同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科に所属する大学院生3名（教員：田附）

中京大学大学院体育学研究科に所属する大学院生3名（教員：來田）

▶ 大学院生たちは、いずれも保健体育科教育に高い関心

5

事前学習の内容

<同志社大学>

- ▶ 参加者が以前に体験学習したドイツの事例を復習（文献だけでなく、写真資料等を利用）
- ▶ ドイツの教育・ディスカッションテーマに関する資料（青少年の貧困対策等）の自習
- ▶ 参加者の理解度をチェックするために教員を交えた学習機会を確保

6

事前学習の内容

<中京大学>

- ▶ IOCが提案するOVEP（スポーツを材料に卓越性・相互理解・尊重を学ぶ教育）の教材の全体像を確認
- ▶ OVEPが提案されるまでの背景や過程（教材の失敗事例、2回の改訂）を学習
- ▶ 国際社会におけるOVEPの利用実態に関する学習
- ▶ 各自分がディスカッションテーマにフィットすると考えたワークを教材の中から選択し、議論の準備を行う（自習）

7

教員側の事前準備

- ▶ 実施教室の選択・接続確認等、学習環境の整備
- ▶ 前日までに打合せを行い、ディスカッションのテーマを決定
- ▶ 運動遊びを介した外国人労働者や難民、そしてその家族の社会性や言語能力促進
—ドイツの事例とOVEP教材から考える—

(結果)
ディスカッションの中心的内容は
「日本の保健体育科教育への応用方法」

8



9

- テレビ会議方式
- 各大学で事前学習等に用いたPPT・文献・動画などは Skypeの画面共有機能を用いてその場で情報交換

ICTを利用したAI学習に対する参加者の反応（1）

- ▶ 初めての取り組みであったため、とまどいはあったが、お互いの表情が見える環境は話しやすい雰囲気を作るのに役立った
- ▶ 回を重ねてディスカッションをすることで、より深まりができると思われる
- ▶ 学んできた内容が異なるため、短時間でディスカッションの着地点を見出すのは難しい
- ▶ 他大学の学生とディスカッションをする機会がほとんどないため、新鮮で、知的刺激が得られた
- ▶ ネットワーク環境が不安定な場合は、音声が聞こえにくくなどもあるので、事前の環境整備は非常に重要

10

ICTを利用したAI学習に対する参加者の反応（2）

- ▶ 自身の予習内容や問題意識を端的かつテーマに即して相手に伝える能力・互いに知識や認識をより深めたり変容させる議論ができる能力が必要
- ▶ 議論を進行させながら、共通の問題意識を探す能力が必要
- ▶ 各自が日頃持っていた関心領域を広げたり、多角的に見直す効果はあった

11

まとめ (学力の3要素との関係からみた効果)

- ▶ 基礎的な知識・技能
双方が異なる予備学習を行った上で「他者に伝える」作業を課すことになる点で効果がある
- ▶ 思考力・判断力・表現力等
常に共通の問題意識を探り、異なる背景を持つ他者に適切に伝える表現方法を探索する必要性を発生させることにより、効果が得られる
- ▶ 主体性・多様性・協働性
事前学習の段階から、AIを協働で進める他者理解のための努力はスタートしていた

12

まとめ (実践結果から得られた課題)

- ▶ 大学内のICT環境整備・教員の利用スキル
- ▶ 大学間のカリキュラムの違いを有効活用できるか
- ▶ 日本の高校教育までの現状を踏まえると、少人数での実践が望ましい可能性
- ▶ ICTを活用したAIを組み込んだ学習を広げるためには、大学間の単位認定制度、時間割等の自由度をあげる必要がある
- ▶ ICTでの出会いだけでなく、現実に向き合うプロセスを組み込み、協働するための仕組みが必要（学生たちの学習意欲の高まりをどう受け止めるのか）

13